

江戸噺 江戸庶民の庭

庭園史に書かれなかった、江戸の下級武士・町人の庭を探る

日時：2019年10月29日（火）17時30分～

場所：深川・清澄庭園大正記念館

開会

中澤昭也（司会）

ただいまより、一般社団法人日本エクステリア学会主催の特別講演会「江戸噺 江戸庶民の庭」を始めたいと思います。まず、主催者を代表して日本エクステリア学会歴史委員会委員長の須長一繁よりご挨拶と、本日の講師の山田順子先生のご紹介があります。

須長委員長よろしく申し上げます。

須長



皆さん、本日は雨の中、おいでいただきありがとうございます。本来ですとエクステリア学会の代表理事である吉田がご挨拶するところですが、本日は出張ということで、代わりに私がご挨拶させていただきます。

最初に少しだけエクステリア学会のご案内をさせていただきます。エクステリア学会はエクステリアの学術的研究を行うために有志が集まったことが設立のもとになったわけですが、エクステリア学会はいくつかの委員会があり、その委員会の活動が日常的な活動となっております。その中で本日の講演会を開催いたします私どもの歴史委員会がごさいます。その他、品質向上、製品開発、植栽、製図規格、街並み、というような各委員会があり、その他に調査部も設置し、昨年、一昨年とエクステ

リアに対する消費者意識の調査を実施しました。エクステリアの意識調査は、これまでも部分的なものではありますが、まとまったものとしては初めての調査結果だと思えます。

これまでの各委員会の活動としては、エクステリア学会が発行した書籍にまとめられております。

さて、本日の講演会ですが、開催の趣旨はお配りした資料に書いてありますが、基本的には歴史委員会の本年度のテーマが「江戸庶民の庭」であり、様々な資料を持ち寄っているのですが、なかなか資料が少なく、「一度、山田先生にお話を伺いたい」という話が議題に上がりました。そこで、歴史委員会の中だけではなく、皆さんとご一緒にお話を聞ければということで、今回の講演会を開催することになりました。

山田先生は、ご案内の資料にも書いてありますが、テレビの時代考証を中心に活動されております。私も何冊が読ませていただきましたが、著書も多く出版されています。

また、信州の上田に年の半分くらいは暮らして、上田紬復活と戦国時代の景観の復活についての活動もされています。江戸、近代を舞台にした小説を読みますと、上田紬を着ている場面が出てきます。この辺りの話もじっくり伺いたいところですが、次の機会とさせていただきます。

それでは、山田先生お願いいたします。

第1部

お噺「江戸の生活の庭・楽しみの庭」

山田

本日はよろしくお願ひいたします。ちなみに、本日の着物は残念ながら上田紬ではなく、大島紬でございます。

ちょうど私はいま、着物の本を書いておりまして、



もちろん上田紬もきっかけではありますが、私の本業は、時代劇をつくるという作業の中の一つの仕事です。時代劇がその時代を正しく描いているかをチェックしたり、アドバイスする。最近はアドバイスが多いですね。ですからもちろん着物、髪型、あとは今日お話する分野、これが全部入っています。今日は、仕事の中の一部をお話するのですけれども、先に言っておきますが、私は研究者ではありません。研究した結果を画像にする仕事です。だから、画像にするところでウソもついています。予算とかいろいろな都合があるでしょ。ですので100%その時代を再現しているとはいえないのですが、なるべくその時代の雰囲気まで再現できたら、ドラマを見ている人が江戸時代に行った気分になれるのではないかと考えています。主役の演技がすばらしくても、周りに違和感があったら「本当にこの時代？」と思われ、そのドラマは違和感がずっと引っ張って行ってしまいうでしょう。したがって、演技がその時代に溶け込んでいってもらわなければならないのが私の仕事です。

ですから今日は、私がウソをついてきた作品のお話をしようかと思っています(笑)。

★ ★ ★

それでは、皆さんのほとんどの方は見ていただい

たと思いますが「JIN-仁」の話をします。これをやる時に、まさに江戸の町をほぼ描こうということで、鋏形蕙斎(くわがたけいさい)という幕末の絵師が描いた鳥瞰図を参考にしました。鳥が見たようにほぼ正確に描いている。現在もイラストレーターの方がいろいろな鳥瞰図を描いていますが、その先駆けともいえます。そして、江戸を描いた鳥瞰図の中で最大の傑作だと思うのは、ちょっと富士山を大きく描いていること。富士山がないと、江戸ではない、関東ではない、ということの一つの現れでもあります。

これは、ワープステーション江戸といって茨城県のつくばみらい市というところにあるオープンセットです。京都の太秦撮影所の東京版だと思っていただけだと思います。建物は建てていませんが、屋台や飾りについては私たちの仕事です。ここにエキストラさん300人ぐらいを入れると、江戸の賑やかな風景になります。こちらが大沢たかおさん、こちらが綾瀬はるかさん。

仁という現代からタイムスリップしたお医者さんが、江戸の幕末でいろいろな事件にあい、様々な病人やケガ人にあって、それを治していくというヒューマンドラマです。

綾瀬はるかさんが演じているのは、咲(さき)ちゃんという旗本の娘。旗本といっても150石、へたをすると与力や町同心なみじゃないかというレベルで、その屋敷を描くのが私の仕事です。

この通りは、暖簾も看板も全部江戸の町の風景です。ちなみに、江戸の町の看板というのは、建物に平行には付いていません。よく時代劇で「廻船問屋」なんてこの辺(下屋の屋根の上)に載ってますね。あれはほとんどない。江戸の看板は歩く人に対して向いています。大きい場合は、屋根の下にもっていくとか、暖簾を看板代わりにしています。日よけ暖簾といって、日陰をつくりますけれど、あれは看板でもあるわけです。ですから屋根にあんな大きな看板は載せない。台風の時には瓦が全部落ちて、大変なことになってしまうというリスクもあります。

今日はすこし手品をお見せしましょう。この絵をよく見ていてください。(画像が変わる)。全く同じ

所にカメラはあります。飾るということはこういうことなんです。日本家屋のいいところは、建物の構造はほぼ一緒なんです、どこも。地方だとちょっと変わりますが、江戸の町だとほぼ一緒。そうすると飾りを変えればどの町でも使える。ちなみにここは男性の大好きな吉原。吉原の大門から入った、最初の中の通りのメインストリートです。本当はもっと広いのですが、ここしかないもんですから、飾ることで吉原のイメージをつくりあげています。

ちなみ奥にブルーバックといって、ブルーのシートがありますが、そこにこの風景をはめ込むと、倍の長さの通りになります。さらに、その奥のブルーが映っています。それにまたはめ込むと3倍になります。いくらでも長くなる。でも吉原って突き当たりのある通りですよ。そうした時には、別の書き割りを持って行って、扉なり、壁なりをつくりまします。

ここには、人間も100人ぐらい入れますが、その人たちにも毎回別の位置に立ってもらって、はめ込みます。同じ位置だと、コピーしたようになりますからね。そうすると人間の目の錯覚で、ずっと風景が続くように見えます。

もう一つ見せませよう。これは門を変えました。これは「天皇の料理番」というドラマのシーンで、明治37年を描いています。これは、門と壁を変えることで、時代変化を行っています。その他に、江戸時代はロウソクの明かりの提灯であったのを、電球にしました。これによって街全体が明るくなる。これが江戸と違う風景のつくり方です。

★ ★ ★

さあ、庭の話をししましょう。これはどこの庭だと思いませんか？ 中庭、坪庭ですね。「JIN-仁」の中で、野風（のかぜ）さんという花魁が出てきた吉原の鈴屋という中にある坪庭です。美術デザイナーが全体をデザインしまして、それを植木屋さんがつくる。大セットです。皆さんがイベントなんかをやるときに、会場の一角にこうゆうのを作りませんか。手法は一緒です。中に根巻きした松があって、その周りに土をおいて、その上にコケをはって、こ

の辺などは植木鉢をそのまま埋め込んでつくっています。イベントのディスプレイとまったく同じ手法ですが、床面よりも植木の根元が上がっています。

これは、創造の産物ではありません。きちんとした資料を写し取ってつくっています。こうした建物と庭は実際に吉原にあって、現実にあつて、絵にした世界を美術デザイナーはつくっています。

ありがたかったことに、この美術デザイナーは時代劇は初めてでした。大学は広大の西洋建築を出た。だから彼は勉強してくれた。一生懸命勉強してくれた結果がよかった。

慣れた美術さんでも長年やってくると、自分か過去にやった手法とか、自分のテリトリーの中でしかやらないし、余っている材料を使ったりする。

しかし、この時の彼は初めてなので、ゼロから資料に忠実につくろうとしていたことが、作品のクオリティを上げた。そこに私が乗り込んで行って、よりリアリティを持たせたことで「JIN-仁」という作品は、賞も山ほどいただきました。その時には、時代考証がしっかりしていた、素晴らしかったと必ず一筆入っていました。それは、こうした積み上げの結果です。申し訳ないけれど、時代劇をたくさん作りすぎた人たちによる、今までのパターンでは、こうした結果にはならなかったと自負しておりますが、大変でした。

これは、仁友堂という、仁先生がパート2になったときに、自分で建てた病院の表門と奥に玄関があります。ワープステーション江戸に行けば分かりますが、この茅葺屋根は戦国時代のものとしてつくられた。江戸時代にも茅葺屋根はあるが、仁先生の幕末のころに茅葺はないだろうということになって、茅葺をはずして、この瓦屋根を載せた。ドラマが終わったら、また茅葺に戻しています。大掛かりです。

この写真ですが、どのような病院がいいんだろうということになって、その時に考えたのが、仁先生がつくるのだから、ある程度は現代の考え方だろう。しかし、建てるのは江戸の大工さんだから建物は完全に和風。しかし、現代のシステムとしてカルテをつくった。私、筆でカルテを書きましたよ。大変でした。カルテ棚というのもつくった。江戸のお医者



さんは、一つのノートに日記のように書いていくので、すごく分かりにくいけれども、現代のように患者別にカルテ棚に分ければ、分かりやすくなる。そういうシステムをつくりました。

これは、さっき述べたように戦国の建物を改造したので、ここに屋根があって、ここは実は濡れ縁で階段が付いていて、この庭に外から直接入ることもできる一種の寝殿造りのような建物だったのですが、江戸のお医者さんの家だから、わざわざこの玄関をつくって、張り付けました。ですから、ここを空けても、向こうはないんです。そのために、ここに庭をつくりました。垣根がある。これも、江戸時代のお医者さんの玄関だったらどのようなしつらえになっているだろうかということを想定して、庭を入れています。

また、奥に入っていくと、ここにさっき言った階段がここに付いている。外していますけれど、ここに階段が付いているはずなんです。戦国ですから。

これは「JIN-仁」の上から見たスタジオのセットです。昔の映画のセットは天井がわりとなかった。ライトを上から照らすので、天井を付けなかった。でも最近は付けるようになりました。なぜなら、俳優さんの背が高くなったから、天井が映らないとおかしくなってしまったからです。ですから、この天井は動きます。シーンによって移動する。照明も入れないといけませんからね。

さて、この空間に何を入れるかということで、さっきの手法で植木を入れている。

この植木は枯れているのではなく、秋のシーンをつくるために、一生懸命着色しました。

これは、その前のシーン。ちょっと茶色もあるけれど、まだ緑。春夏秋冬のシーンによって、木のほうも変化させなくてはいけない。単純に春のあとに秋だといいいのですが、先に秋があって冬があって、夏になるときは、後から枝を足さなくてはいけない。枝ぶりは変えられないので、この辺をよく見ていただくと、釘で枝がとめてあります。

さて、この庭は、ここから奥に向けて抜けていますよね。渡り廊下の向こうにはこうゆう空間がある。これは後で話しますけれど、江戸の旗本とか、商家の庭のつくりです。かならず作業場というのが必要になってくる。洗濯して干したり、この場合は病院ですから包帯を干したり、患者さんの着ているものを干したり、けっこう干し場があるという話になりました。この辺に井戸があるのですが桶を置いたりしています。ここは便所。手水鉢も置き、実際に人が使うことを想定してつくっている。そうしないと、台本で「便所に入る」などと書かれたときに困るので、あらかじめ普通の家と同じものは、全てそこに配置しておきます。

今日は庶民の庭というテーマでしたけれど、大名屋敷とか大きい旗本屋敷は既に皆さんはご存知だと思うので、この150石規模の旗本、侍といえどもペーペーのお屋敷の庭ってどうなんだろう、ということで、あえてそれもやらせてくださいとお願いしました。ということで、今日は150石の想定の橘家(結婚により橘仁)の庭もやっています。

これは、さっきの門。半分開いていますけれど、これを開けても向こうには何もないんです。開けて入るところまでを表から撮影するので、入ったらスタジオのセットに移動する。石畳が敷かれている。ちなみにここに椅子が二つあるのですが、誰が座るか決まっている。なぜなら、背もたれがあるのが男性、帯がつぶれるから背もたれがないのが女性、当時の帯はかさがあるから。結局、大沢たかおさんと綾瀬はるかさんは座りませんでした。

ここに既に少し植木が見えていますね。門から入って右側に庭をつくっています。

今度は、セットの上から橘家を見ているところで

す。ここは母屋です。ここが納屋なんですけれど、後に仁先生はここに居候して住むことになるのですけれど、こうゆうのをつくりました。坪庭で全部座敷で囲っています。

さあ、大問題が起こってしまったのです。こうゆう庭、台所方向から見ています。カッコいいお庭です。あえてここに家庭菜園をつくれた。向こうにお座敷があるので植え込みの庭をつくりました。今度は反対側から見て、向こうに菜園が見えますけれど、本当に住める状態の家なんです。雨漏りはしませんけれど。

さあ、これは廊下と菜園がぼっち映っていますが、私が初日に行った日に、ここにあってはならないものがあつた。「すぐ抜け」と言って抜いた結果、ここに歯抜けができています。「先生どうしよう」と言われて、泣かれています。

ここはツルインゲン、これはいいんです。これはサトイモ。私に言わせると、湿気を好むサトイモとツルインゲンが同じ畑は、水の問題でよくない。でも、そんなことは言ってもらえない。高さがほしいから。

でも、なぜあそこが歯抜けになったか。行って見たらなんとあそこにトマトが植わっていた。「なにこれトマトじゃん」と言ったら、「いや先生、実は取っときました」と返された。

これがアップになった時、引きでも今はテレビの画面が大きいから、けっこう見えてしまうんです。植物が。そこにトマトがあるのも分かっちゃう。最近家庭菜園でトマトをつくっているの、葉っぱでトマトを見分ける人はいくらでもいる。実があるかないの問題ではない。ということで、全部引っこ抜いた結果がこの状態です。

やっぱり、時代考証家としては、さっきの松などは植物を気にしなくてもいいのですが、こうゆうところに目を光らせておかないといけない。江戸時代になんか植物、よくあるでしょ、「花瓶のなかは菊がいいですね」と聞かれても、最近流行のスプレー菊は江戸時代にはないですから。そうゆう話とか、けっこう植物に弱いんですよ。とても危険です。

私は、一応言っときますと、コンテナガーデンマスターとして、それからグリーンアドバイザーをもちまして、そして、ジャパンガーデンデザイ

ナー協会の特別会員です。植物には強いですよ。口だけですが。

今までの成果をじつは、私は本に書いておまして、『幕末江戸時代考証』という、まあ想定したデザイナーさんが書いた図面を、本来こうであつたはずだよね、というのを書き直した結果です。

ここに家庭菜園がありますが、私はここに家庭菜園は絶対にもってきません。この廊下は客が通る廊下だからです。本来はこちらに菜園があつたはずだということです。

仁先生の家ですから、ここが門で納屋、ここに番人がいる。

これね、笑っちゃうといたら失礼ですけど、番組がヒットしたおかげで、あのセット、屋敷を書いた人がいるんです。インターネットに載せてくれた。その時に一応、原作の村上もとか先生に伺いをたてたら、こうゆう家だったって「許可をもらいました」ということでした。

漫画の家はこうゆう家だった。でも、ドラマは漫画を原作にはしているけれども、その通りにはつくっていない。なぜか、こんな家はありえない。これ、門から入って（玄関へ）曲がるんですね。お武家様の家で、門から曲がることはありません。（門から玄関までは）まっ直ぐか、まっ直ぐがいやだったら、少し傾けます。客に曲がらせるというのは、非礼にあたるからです。御用聞きはここから入ってきませんから、曲がろうが、どうしようがいいんですが。

それから、床の間はこっち。家全体を想定して書く漫画家はそういらっしやらない。だから、後だしなんです。

私が担当した先生で一人だけ、『サムライせんせい』というテレビ朝日でドラマにもなった、武市半平太が現代にタイムスリップした、私はタイムスリップものが多いんですが、作品では、きちんと土佐藩の藩邸の中の図面をつくらうとしましたが、そういうケースは多くないです。

余談になりましたが、さっきの家、門から入って



きて、客の視線に入るここに、さっきの植え込みをつくる。勝手口の入り口がことここについているのかな。だからこう入って裏庭に抜けられる。それからここに、さっきご覧になった日本庭園をつくりまして、ここに、ご都合で家庭菜園をつくっていますが、本当はここに家庭菜園はあるべきだし、それから、先ほどの植え込みも、ここが座敷で、床の間はこっちですから、客から見て塀沿いに庭、それから回り縁ですからこっちにもあって、そこで木戸があって家庭菜園があるべきです。家庭菜園は直接(客から)見られないようにする。それが武家の格式なんです。

これは、資料ですけど、『武家に嫁いだ女性の手紙』という本の中に、ちょうど旗本 200 石のお屋敷がでてきます。ほぼ同じ構図になっています。ひとつのパターンなんです。間口は、旗本屋敷というのは大身でなければ狭いですけども、奥行きがあって、赤いところが庭になっていて、ここにも目隠しの垣根がこう入っています。そして、木戸があって、その向こうに見えないけれど畑がある。ここが犬小屋だそうです。もしあるとしたら、家庭菜園か、プライベートな花壇があるのでは、と想定しています。

東京都の公文書館へ行くと、こうゆう江戸末期の旗本の図面がかなり残っているそうですから、興味があれば行って下さい。

なぜ残っているかという、幕末に新政府が旗本の屋敷を全部取り上げて、そこに自分たちが住むことになったときに、自分たちで全部を見るのは大変ですから、旗本たちに屋敷の図面を提出させた。その結果、いまでも残っている。草木などは書いては

いないですけど、ほぼ想定できます。

これは、同じ 200 石ですけども、町奉行所の与力。与力ですから旗本よりも格は下なんですけれど、立派なんです。与力は現金収入などもあって、家もわりと立派につくれる。

ちなみに、江戸の旗本、与力、同心がどのくらいの広さに住んでいたか、差はあるけれども計算の仕方があります。1 石あたり一坪。郊外にいくと一坪半とか、二坪。それから同じ 200 石でも、ちょっと力のある人だと、広めの方がいいかと、裏工作もする。それから、旗本屋敷って、この向こうに他の人の屋敷があつたりするんです。それを、内々に買うことができる。表の屋敷は配分屋敷といって、官舎。でも、他の官舎の一部を借地としてもらって、屋敷延長ということもできるから、お金があれば基準よりも広い屋敷を持つこともできました。

さて、庭で見ると、ここが表座敷、ここが中庭、坪庭、周りは廊下、そして、ここに「花」と書いてある。花壇、なぜなら主人の庭ですから。それから、ここは隠居所。だから、ここも花壇もしくは畑にしているかもしれない。正式な庭から、花壇や、その先に、野菜やら何やらをつくっている。ここには木が植えてある。梅ノ木とか柿木とか。だいたいこの辺に植えているのは、果樹。梅干は自家生産だし、柿、いろいろなものをつくっています。

(歴史委員会の) 皆さんが研究している中に、滝沢馬琴の屋敷の図面が出てますけれども、馬琴の家なんか、ある年の秋に 300 房のぶどうが取れた。そのうち 100 は売って金にした。さらに、柿が何十個取れたとか、そういう記録がたくさんある。畑もあるが、果樹も多かったことが分かります。だから、土地があれば、食べるだけではなく、売って現金にもしていたようです。

先ほど、少し言いましたが、私は漫画の時代考証もやっています。

漫画家さんが、この絵を描いてきた。場所は八丁堀の与力の屋敷。そこで私は、「八丁堀の与力の家が生垣のわけがありません。板塀にしてください」と言った。そして、試しに書いてみたら、「板塀に



江戸図屏風・左隻（国立歴史民俗博物館）

したら中が見えなくなっていて、漫画として面白くなから、やっぱり生垣に戻しました」となった。必ずしも時代考証通りにやれば、それが作品としていいかといえば、それはストーリー展開もあるので別です。しかし、本当のことを知っていて嘘をつくのとは、本当だと思っていて嘘をついてしまうのでは、恥のかき方が違う。

いまは、インターネットの時代だから、間違いを指摘されても「知っている。でも、都合があつてこうしました」ということになります。

★ ★ ★

これは、先週、江戸東京博物館に行ったら、「特別展 侍」をやっていました。その中に「久留米藩士江戸勤番長屋絵巻」の中の藩士の部屋を描いたものです。藩士は、写真がないから、自分の部屋を思い出しとして描いた。だいたい大名屋敷は2階建て、しかも堀沿いに長屋がある。だから、長屋＝堀なんです。2階建ての長屋が堀の代わりです。だから、2階からの視線で見ると、ここに堀があつて、なかに竹の垣根があつて、ここに庭がある。この規模は、勤番侍、50石ぐらいで、皆さん単身赴任です。江戸定番であれば奥様もいますが、それでもちょっとした庭はもてたということです。

いまでいう、マンション、集合住宅に住んでいる人の庭の考え方が同じということが分かります。

この絵は、鉢植えの朝顔がある。その前で、絵かき文章を書いている様子です。この絵の面白いところは、さっきの壁に紙が貼つてあつて、それをピリッと剥がすと、下からこの絵が出てくる。さっき見たのはここまで、ここを剥がすと、独り者の男が、独りではないかもしれませんが、楽しんでつくった庭が出てきた。これが、最下層の武士の、しかも江戸に単身赴任している人がつくっている庭なんです。

さて、いよいよ本題です。

これは皆さんご存知ですね。江戸図屏風、今日は国立歴史民俗博物館の江戸図屏風です。

ここ江戸城、ここ天守閣。明暦の大火まで天守閣はありました。だから、この絵が描かれたのは3代将軍家光の時代であろうということで、寛永年間です。

そして、この通りが今でいう中央通り。銀座、京橋、日本橋。ここ銀座です。表に商家が建つて、旗も立っています。なぜ旗が立っているかという、後々には日本橋でやるのですが、初期のころは3月のひな祭りや、5月人形の市がたっていた。そのための景気づけの幟なんです。

本当はここに金座、金を作る屋敷があるんですけども、都合の悪いところは雲でかくれています。狩野派の特徴です。

ここは日本橋です。ここも120mぐらい、10軒ぐらい家がならんでいたはずなんですけど、絵では3

軒です。ただ、ここで見ておきたいのは、周りが全部商家に囲まれた中に、植木が見えている。全部そうですね。寛永のころは、江戸最初のバブルの頃ですから、商家でも角の商家はみんな3階建をつくる時代だった。その中に、木が見えている。それは何故かという、アップで見ますね。蔵、蔵、その前に木が植えてある。この絵が本当にリアルかといわれると困りますが、これは今で言う絵葉書みたいなものです。人に情報を伝えるものなので、芸術ではない。江戸とはこんな町ですよと伝えるものなので、嘘はついていません。

さて、これを江戸の研究者たちはどういつているか？

さっき3軒しかなかったところに、9軒書いてますね。120m四方が一区画。江戸の町の特徴はこの道を挟んだセットで一つの町。ここに会所と書いてある。その周りに蔵や木が配置してある。ここは、今のマンションで言えば共有スペース。それが必ず入っている。ここに所有者はいないんです。ほかの土地は細かく分けても、ここはみんなの共有物となっています。

この共有地には実際に何があったか。

これは、洛中洛外屏風といって、京都の町ですが、木があるのは当然として、井戸があって、何かが干してあったりする。ここは、周りの人たちの井戸とか便所とか、そういう、後の長屋にもでてくる共有の場所。そこに、夏は日陰をつくるため木を植える。これが、寛永の最初の江戸の町割り、木も大きかった。

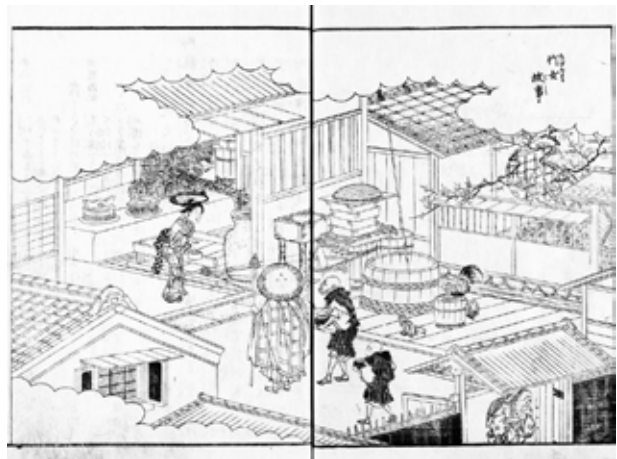
京都の特徴は家の中を抜けていくが、江戸は家の間に路地をつくって抜けていく。それが、江戸と京都の違いです。

これは、明治の芝浦の建築ですが、ここを見てください。商家が並んで、その中に所々松ノ木とかが見える。これは、さっきの配置を、江戸郊外ですからつながっている。明治の頃まで生きていた。ここに馬が引く電車、馬車鉄道が走っているので、その時代の風景だということが分かります。

これは、明治37年が舞台の「天皇の料理番」と

いう番組で、福井県の鯖江の乾物屋さんです。さっき見ていただいたワークショップ江戸で撮りましたから、建物は江戸なんですけれども、日本家屋のつくりは同じなので、明治でも大丈夫です。今度、ここの特徴は、看板が建物に対して平行になっています。明治の風景です。古い町並みは江戸から続いていると思われがちですが、明治の風景が多い。川越や栃木などがそうです。

この家、主人公の徳三くんが養子に入るので、その家の庭を再現しなくてはならなくなりました。これは、さっきの江戸の商家の表門と裏庭がどうなっているかと、同じ考え方になります。



これは江戸名所図会の赤羽の心行院の竹女故事の挿絵。もともとの舞台は日本橋、大伝馬町の佐久間勘解由の勝手口。日本橋近辺の町名主ですから、いまで言う町内会長、日本橋商店組合組合長みたいな人のお家の勝手口なんです。

ここは、お店の建物、裏に会所地があって、そこに対して門があったり、裏に路地ができてくるので、裏口の門、それから隣の家も囲ったところに梅ノ木を植えていて、ここに井戸があります。この時代は共用の井戸というよりも、各家にあります、会所地側にこういうものを入れています。

さて、それをドラマでどうするか。これは正月のシーンで餅つきがありますが、この中についた餅をまるめたりします。ですから、これも裏庭の勝手口を出たところに物干し台があったり、反対に垣根を

植える、ここはトイレ、手ぬぐいが掛かっている。冬のシーンにしては葉が青々としていますが、CGで茶色にします。雰囲気を出すためにいろいろなものを飾っています。

ここは、正月なのと、北陸という特質をどうやって出すか。また、ここは乾物屋でもある。だから、松前こんぶ、サトイモの茎、保存食、それから鮭の塩引きなんかもある。こんなふうに一生涯懸命飾って、冬の正月前の北陸の商家をつくっています。

★ ★ ★

さて、江戸に戻ります。

さっきの長屋の表通りの木戸です。木戸というのは、町と町を仕切る木戸、初期の頃は8時、後半になると10時になると閉めていた。通過はできない。通る場合は木戸番にお願いします。そうすると「カーン」と1回鳴らせば、一人ここを通りますよという合図。通る人数分鳴らして、次の木戸番に知らせていた。

表通りの中に路地があります。これが、長屋に入っていく路地。ここは、今までは会所地で、蔵だとか、井戸とか、便所などがある共有スペースでした。後々に人口増加で、ここに裏長屋を建て始めた。ですから自分たちの共有地に、この中で力のある人が権利をもらって、ここの大家さんになった。会所地に建ったのが裏長屋。そこに土地があったらから、共有地がどんどん裏長屋に変わっていった。

その長屋の一つの例です。

これは表通りから、ここに木戸があります。ここにもあります。ここが表店。入って行くとここに井戸と便所、ここは下水なので、この場合は行き止まりになっている。でも、表から下水の水が中を抜けて外に出ている。ここは水が溜まらないような仕組みになっているが、実際には排水管がないからビチャビチャでしょう。

こっちは家は、ここが路地。路地を入りまして、こっちに抜ける。ですから、長屋といっても、時代劇にあるような一つのパターンしか思い浮かべないけれども、その土地の活用や、権利を持っている人の都合によって、いろいろなパターンの長屋の建て

方があります。

これはワープステーション江戸の長屋。ここが長屋の入り口。入り口のところに今で言う表札がある。「尺八指南」など、裏長屋でも、その中で商っているものを書いている場合もある。職人や寺子屋、占い師などが看板を出している。ですから長屋口はけっこう賑やかでもあります。

小さな植木もあります。長屋の植木鉢。棚をつくって並べています。

これは冬のシーン。夏になると、朝顔も咲くのでしょうね。ここでは、植木鉢は飾ってありませんが。

ここの草を抜けとよく言います。長屋の人たちは自分たちの家の周りを草ぼうぼうにしておくわけはないだろうと。助監督は、自分たちで草を抜いた経験がないから。草ぼうぼうだと思っている。これが、どぶ板です。この下にさっき言った下水が入っているはずですが。実際はないですが。



これは、歌川芳藤さんの「おもちえ絵」、猫の長屋。人間を猫で全部表している。ちなみに芳藤さんは猫

の絵で有名な国芳さんのお弟子さんです。これを見ると、どんな人たちが長屋に物を売りにきたかも分かります。洗い板で洗濯もしている。懐かしいですね。これは八百屋さんですね。ただし、この絵は江戸ではない。なぜなら、この「おもちゃ絵」というのは、幕末から明治の初頭にはやった。子供の教育用につくられた。子供の絵本です。これが明治の初頭にはやって、この後、温泉とか、観光地のシリーズもありました。いろんな猫が大活躍しています。

さあ、これは私が関わった『幕末捕り物帳』の長屋の風景。江戸中の水道には、いろいろなものが落ちて、流れてくる。それがたまたま重たくて沈んだりするので、必ず年に1回、長屋中総出で、拾ったりする行事があります。そんな会話をしています。

さて、玄治店（だな）というのは今の人形町あたりにあった長屋なんです。岡本玄治というお医者さんが江戸の初めに將軍様の病気を治したことで、その地区の会所地のような所を拝領、もらって、そこで現金収入を得るために長屋を建てたなかに、国芳さんは住んでいた。長屋というよりは、一軒家にちかいものですが、この辺から庭があって、表にあって、朝顔かなんかがあるのでしょ。これを描いてくれた人がいまして、絵師の所を描く絵師がいたんですね。大の猫好きで、猫が20匹ぐらいうヨウヨウしていたそうです。

すこしだけ余裕のある人たちは、このぐらゐの庭を持って、このぐらゐの植木を植えて、そして楽しんでいました。ここは板塀でなく生垣でも大丈夫です。

表を通る人から、「師匠、絵の調子は」などと言われながら、楽しく暮らしていたのでしょ。だから、あえて竹垣にしているのだらうと思います。住んでいる人の好みによって変わります。

それでは最後に。皆さんはご存知かどうかは知らないですが、ほおずき市がありますね。この人、ほおずき市で買った鉢をもっていますね。私は「これは違う」って指摘しました。「先生どこがちがうんですか？」と言われました。ほおずきは今は植木鉢に植えて売っているけれども、昔はほおずきは薬と

して売っていた。干して売っていた。だから、生はかえって面倒くさい。「束にして干したものにしてください」と言いました。

いまそうであるから、江戸もそうであるかといえ、必ずしもそうではない。その先入観が怖い。あと、細かい部分は青木先生の『江戸のガーデニング』（平凡社、1999）に書いてありますから、それを見てください。

これで終わります。

第2部 パネルディスカッション

中澤

ここからは、庭をテーマにしたパネルディスカッションを行いたいと思います。山田先生を中心に3人のパネラーをご紹介します。建築・住まいの点から、庭園、設計・施工の点から、園芸の点から、3人の専門家にご出席していただきました。

まず、建築・住まいの立場からは蒲田哲郎さんです。（経歴紹介略）。次に庭園設計・施工者の立場より山澤清一郎さんです。（経歴紹介略）。さらに園芸の立場からは大嶋陽子さんです。（経歴紹介略）。最後にコーディネーターとして今回の主催者メンバーでもある須長一繁さんをご紹介します。（経歴紹介略）。これからは須長さんに進行をお願いしたいと思います。

須長

それではパネルディスカッションを始めたいと思います。

まず、山田先生、ご講演ありがとうございました。今まで私たちは江戸の庶民の庭ということで、いろいろな資料を見たりしていましたが、資料を見ただけだと肉付けがないというか、そこで住んでいる人の生活が見えないのですが、先生のお話を聞いていると「なるほど」と思うことがいくつもいくつも出てきて、非常に勉強になりました。

それでは、まず最初にパネラーの方から、山田先生に、今日のお話を含めてご質問をいただければと思います。まずは蒲田さんお願いします。



パネルディスカッション

蒲田

今日は貴重なお話をさせていただいてありがとうございました。エクステリア学会は、学術団体であると同時に、実際の業務ともつながる活動をしていますので、仕事にも活かしていきたいと思っています。我々も江戸時代をテーマとして1、2年たちますが、今日お話された江戸図屏風や長屋の絵なども比較的、資料として見ているのですが、それ以外の、今日お話された石高が少ない旗本、商家の住まいなどは、今の我々の住まいと通じるところがあるのではないか、活かせる部分があるのではないかと考えております。鑑賞する庭であったり、作業場として使っていたり、家庭菜園であったり、なども現代に通じると思っています。

そこで、現代の庭と、江戸の町の庭の使われ方との違いなどについて教えていただければと思います。

山田

先ほどお見せした、庭がちゃんとあるような家には縁があります。濡れ縁であったりしますが、そこが、現在のいわばオープンスペースというか家の中へとつながる場所で、そこで、座布団を出してきて日向ぼっこをしたり、作業をしたりしていた。会場の場合はそれがありませんが、その代わりに家の外に床机を出してきて、そこは共有の場所でもあるけれどもオープンスペースだった。屋台があったり、みんなの作業場でもあった。そこに長屋ができてくるとなくなり、庭があっても隙間のような狭いもので、

風が抜ければよいという程度になっていった。でも、江戸の皆さんは庭が好きだから、名所などに出かけるようになりました。長屋の中ではできないことは、出かけて楽しんだのです。

須長

ありがとうございました。山田先生は庭をつくる立場でもあります。江戸時代の庶民の庭は活用されている感じがします。今は、鑑賞を主とした武家の庭を継承しているような気もしますが、山澤さんほどのように感じていますか。

山澤

つくる側といたしましては、日本庭園をつくるのは全体の1割ないぐらいです。それは、実用性がないからとも思うこともあります。一方で、庶民の庭の作業場であったり、菜園だったりするものも庭であると思い、いろいろ調べているところです。そこで、お聞きしたいのは、先ほどの講演の中にあつた、会場の庭で植木を植えています、それは日本庭園をつくっているのか、植木は観賞用としているのか、果樹として実用性が主なのかを教えていただければと思います。

山田

はっきり言って両方だと思います。例えば滝沢馬琴やさっきの幕末の女性の日記などは、作松を買ったとか、植えたとか言っております。作松、すなわち形をつくって植木屋さんの手も入っているので、



パネラーの蒲田哲郎さん

それは庭としてつくろうとしている。それと同時に、柿を買った、ザクロを買ったと書いてある。だから、庭が広ければ両方やった。

最初の会所の木は、木陰ができたり、ものが干せたり、ある程度役立つものとして植えた。それと柿などの果樹も誰か一人というものではなく、その周りの全部の人たちの楽しみであったと思います。共有のものという考え方だった。

それがだんだんと細分化され、権利意識が強くなってくると、小さくなった自分の庭の中で、その中でできること、庭園ができる人はやるし、菜園を主にする人もいる。

庭がちゃんとあって、花壇があって、その奥に野菜があって、果樹園があって、それが本来の理想像である。そのどれを選ぶかは、その家の都合や予算によります。

現代でも、広い庭があれば横に家庭菜園つくったりしている人もいますし。狭ければアプローチだけの庭もある。花が一杯の家もある。それは好き好きだと思う。

江戸も現代の庭も違いはない。その人の趣味であり、人生でもありますから。人生で何を求めているかですから。私は食いしん坊ですから、松よりも柿の木ですし、柿は年月がかかるから、蕎麦にしようという発想です。

須長

今の時代は洋風の庭が多いと思います。こうした庭は大正の頃からだと思いますが、花の庭、菜園の庭が日本に入ってきて、すんなりと日本に受け入れられたのは、日本にこうした伝統があったからとい



パネラーの山澤清一郎さん

う気もするのですが、大嶋さんほどのような印象を持っていますか。

大嶋

今回のテーマが、江戸の庭ということで少し勉強してきましたが、江戸は平和でバブルと呼べる時期もあったことから、「菊あわせ」という菊の品評会があったり、薬草で入ってきたシャクヤクやボタンも美しさが求められ、品種改良も行われていたという園芸の歴史があります。そういった長いベースが日本人の心の中で培われているものが、例えば近年のイングリッシュガーデンであったり、コテージガーデンというものが入ってきたときにも、江戸と同じように植物を愛でるといふ部分があったので、すんなりと受け入れられたのではないかと思います。江戸時代の園芸を楽しむ文化や、新しいものを追求したりすることが生活の身近にあったということが、西洋の庭園文化が入ってきて、受け入れて普及していったのではないかと思います。

山田

馬琴は梅の木をあえて品種を指定して買っています。単に白梅や紅とかではなく、苗木を売る商人も、この梅はこうゆう品種で大きくなります、すっぽくなりますとかを知っている。だから求める人がいて、提供できる技術があった。それが江戸の園芸であった。滝沢馬琴は園芸のプロでもなんでもないけれど、一般の人たちが品種を指定して買っていた。朝顔なんかもそうですね。

一方、広尾なんかはススキが広がっていて、あえてそれを見に行くこともしていた。日本人は庭と外の風景をうまく使い分けていたのではないかと思



パネラーの大嶋陽子さん

う。庭にはこだわられるけれども、外の風景は自然を愛する。それがたぶん、フランス式、イギリス式の庭園が入ってきたときにも抵抗がなかった理由かと思えます。

須長

蒲田さんはエクステリアの消費者の意識調査をされてました。そこで、庭というものが一般の消費者にとってどういう空間なのか、植物に対する意識も含めて紹介いただければと思います。

蒲田

昨年、植栽に関する一般の方々の意見を聞きましたが、二つ興味深いことがありました。一つはどんな木を植えますかと、戸建ての注文住宅に住んでいる方に聞きましたところ、季節に花を咲かせるハナミズキとか、いわゆるシンボルツリーと呼ばれている樹木が一番多かったのですが、これは我々も提案されていて、お客様もそう思ってくださいなのですが、以外だったのは果樹ですね。果物の木が非常に多かった。我々の側からすると、それほど多くは提案をしていないので、そういう意味では、果物などが自分の家であるのは、やはり今でも楽しいことなんだと分かりました。

もう一つ、植栽を提案すると、手入れが面倒だとか、虫がつくからいやだとか、若い人などからよく言われるのですが、江戸時代はそういうことに困っていなかったのでしょうか。

その辺りを教えていただければと思います。

山田



山田順子先生

江戸時代も虫は生きていますからね。でも、ちゃんとしたお庭には、植木屋さんがつきっきりだった。旗本屋敷にしても、よく植木屋さんが出入りしていました。当然、虫も竹箒みたいなもので取り除いていた例も出てきますので、虫はいやだったのでしょうか。ですけれども、今ほど嫌われていなくて、出たね、では取ろうかね、とう感じだったのではないのでしょうか。ちゃんとしたお庭はけっこうプロの手を借りていますね。庭を造る余裕＝植木屋さんを雇う余裕、というセットであったのだらうと思います。

須長

江戸の町には植木屋さんが多かったという話ですが、日本橋などの江戸の町中はともかく、郊外の目黒、新宿などは植木屋さんが集まって生活しているだけではなくて、見本園みたいにして人を呼んでいたという話もあります。染井なんか有名ですが、その辺りのお話をお願いできますか。

山田

今の地名で言えば、染井、巣鴨辺りに植木屋さんがたくさん集まっています、自分のところで品種改良したものを展示するんですよ。だから、うちはこうゆう新しい品種をつくりましたと見せて、気に入ったら買ってもらう。木もそうですし、菊とが植物もそう、朝顔もそう、ボタンもそう。もちろん買ってくれない人も山のようにいるんです。でも、いいんです。お茶を飲んで、団子を食べて、饅頭食べて、お萩を食べて、お金を落とし、つきでに便所について肥料を落として帰ってくれる。まさに遊園地のようなものなんです。

もう一つ面白いのは、甲州街道沿いに、今はないのですが、種屋さん街道があった。それは、今作っている大根よりも、よりおいしい大根とか、人参とか、菜葉を植えたほうが、いい値段になるから新しい種を買いたがった。だから、大根を収めた、市場などに下ろした帰りに、種屋に寄って、ほかにいい品種はないか種を探す。そうしたお客がいるかぎり、売る側も品種改良を重ねる。花や木だけでなく、野菜も品種改良していた。ビジネスですね。

須長

大嶋さんは庭をつくるなかで、花と野菜というのは要望も多いのではないかと思います。江戸の園芸が今に通じるものはありますか。

大嶋

今日、山田先生のお話を聞く中で、料理に使うもの、今日食べる野菜などをつくっている場所が、旗本屋敷でも設けられているというのがありました。庭の中でも、見る庭、園芸を楽しむ趣味の庭、食べるための野菜の庭という、エリア分けされていた。今でも、マンションの1階のような小さな場所でも、お客様に言われるのは「一角でもいいから自分で野菜を植えたい」。リビングから見える所は花が見えるように鉢を置いて、草花を植える。その一方で、野菜を植える場所も設ける。そうすると、だいたいご主人が、野菜を育てて、奥様がお花という分担になります。場所が狭くても、すみ分け、役割分担ができていて、庭によってご夫婦がすごく仲良くされている。旗本の庭とは違うのかもかもしれませんが、何か通じるものがあるのではないかと思います。

山田

一つ残念なことは、旗本もお殿様も鍬はつかわない。中間（ちゅうげん）、門番とか、そうゆう男性で勤めている人が鍬を使っていた。150石の橘家に中間が一人いましたが、第1回目で殺されて、後任はどうするの」と聞いたら、「めんどくさいからなし」と言われました。旗本の格式として「いないわけにはいかないでしょ」ともめたこともありました。

旗本でも常にお城に行っているわけではありませ

ん。ちゃんと役がある人でも、3日に1日ぐらい。お城に行く場合でも、お供にいかなくていい中間が、鍬をもって作業をしていた。

それはなぜかという、人手は削減できないが、その人たちの生活がかかっている。雇うけれども給料が払えない、ということもある。その時に、自給自足で野菜、果物をつくる。余っている人間がそれをやることになっていました。

須長

それでは、会場の方から、何かご質問はありますか。

質問者1（粟井）

今日は楽しいお話をありがとうございました。一つだけ質問いたします。

畑が旗本屋敷の敷地の奥にあるということでした。江戸後期の畑は、食べるための畑なのか、それとも趣味ももなった畑なのか。その当時の自給自足の畑の価値は、どのようなものだったかについて、教えていただければと思います。

山田

江戸後期は現代と一緒に、旗本屋敷も普請のいい所にあると、畑にするよりも貸したほうが、地代が取れるのでいいということになりました。馬琴も旗本屋敷の一角を借りていた。畑にして自給自足しているお金と、そこを貸して家を建てて、もしくは家を建てて貸している地代、家賃収入を取るか、どちらが得かを選択するようになる。どんどん人口は増えますが、それ以上長屋は増えない。そこで、畑になっている旗本屋敷を削っていくことになる。中には唐津の大名で松浦ようざん（静山？、唐津は小笠原家？）の下屋敷は、その裏の塀はほとんど壊れていて、屋敷の一部を隣の人に貸していた。おそらく畑だったのだらうけれど、貸したほうが収入がいいので、貸していました。

そうすると、野菜の自給率はどんどん下がっていきます。その一方で、江戸郊外の農家が、水田をすするよりも、野菜などをつくって、現金化していました。年貢を現金で納めてもいいという法律に変わったからです。そうすると米をつくるよりも坪単価当

たりでは野菜などのほうが稼ぐようになり、農地も畑に変わっていった。生産量も上がっていく。そうすれば、旗本屋敷の裏庭で野菜をつくらなくても、貸して現金収入を得て、買えばよくなりました。

須長

江戸も現代も人の考えることは、あまり変わらないようです。他にどなたかいらっしゃいますか。

質問者2

今日は静岡から来ました。地方の豪商の庭では池などがよくあるのですが、庭の中の池についてはどうなっていましたか。

山田

池は明治になってやたらと出てくるのですが、江戸時代は、池をつくることはその土地を無駄にしていることになるので、池を持つということは贅沢でした。今に残っている庭で、池があって立派なものは、明治以降につくられたものが多いのではないかと思います。その前は作業の庭であったり、木が植えてあるくらい。反対に、大名屋敷や旗本屋敷などでは、また、滝沢馬琴の話ですが、馬琴は旗本屋敷の一部を借りたのですが、当初は池があった。馬琴は、まずその池をさらって鯉だの魚を全部食ってしまった。そして埋めたんです。土はどこから持ってきたのか。川をさらうでしょ、川底に砂が溜まると。その川さらいの土を買ってくるんです。買うというよりは運び賃なんです、その土で、馬琴は埋めてしまった。埋めて、そこに庭木を植えたし、花も植えた。野菜もつくった。池＝贅沢、という発想なんです。だから、江戸時代の商家に池はほとんどない。明治以降になるとやたらとつくるようになった。地方に行くとき確かに池がある。それには理由があって、お殿様が来るとか、お殿様を呼べる庭だったからです。下屋敷扱いだからです。

質問者3 (林)

いま、庭の中で大事にしなくてはならないのは土づくりだと思っています。江戸は畑をつくったり果樹を植えたりするときに、昔は土が豊かだったから耕すだけでできたのか、それとも他に何かやって

いたのでしょうか。

山田

江戸は基本的に海拔ゼロメートル地帯ですから、他の土地に比べれば栄養もありますが、しかし、土の栄養は枯れていきますから、さっき言った水路の底をさらうとか、川をさらうと養分いっぱいのが得られます。いまは、ただの土で埋めたりするので、肥料や栄養分を入れたりしないといけませんが、川底にはいろいろな養分が入っている。そこに人糞などの肥料を足していた。

土への肥料は大切だが、その供給元が川だったりお堀だったりしたのです。

江戸城のお堀、現在の皇居の周りですが、あそこをさらう権利をもっている人がいた。その泥は葉も沈殿して腐っているから非常に栄養があって、価値のある土だったからです。

須長

ちょっと蛇足になりますが、私が呼んだ資料の中で、貧乏旗本が、売るのは何もなくなって借金だらけという時に、最後に屋敷の下の土を売ったという話がありました。これは山の手の武家屋敷の話です。これが下町にいくと埋立地であり、何回も火災にあい、焼けたゴミなどが混ざっている、庭をつくるにはよい土ではなかった。庭をつくる時に土を買わないといけない。そうした需要があった。

その貧乏旗本は、庭の土を売るとばれるから、屋敷の下の土を売って金にかえていたという本がありました。

山田

今はホームセンターで買えますが、江戸時代も土に商品価値があったんですね。ついでにトイレだと、排泄物から火薬に使う硝石が取れる。結構、土に価値があったんです。

須長

他にいらっしゃいますか

質問者4 (犬塚)

裏長屋に住んでいる人たちの鉢植えですが、鉢植

えがはやって、裏長屋の人たちも長屋の一角に柵をつくって、庭のかわりに楽しむということはあったのでしょうか。浮世絵などを見ると、高そうな化粧鉢のようなものしかないのですが、そうでない一般の人たちが買える鉢植えもあったのかお聞きしたいと思います。

山田

まず、鉢はピンキリです。素焼き的なものもあれば、古伊万里のようなものもある。概して浮世絵などを見ると、ちょっと柄の入ったような鉢に植えてあるので、鉢ごと飾っていたのでしょうか。長屋だったら、駄鉢でいいからということかもしれません。置き場所は、江戸初期の会所地であれば、そこに皆

で飾ったでしょう。でも、江戸後期で便所と井戸ぐらいしなくなると、家の前の路地に面した日の当たる側に柵をつくって置いた。それから、いい長屋だったら、棟割といって、屋根の真ん中で割って、二間、6畳と4畳半ぐらいになってくると、こっち側（玄関と違う側）にも戸がありますので、余裕はないが20～30センチの縁を設けて、塀までの間にすこし木を植えるか、縁に植木鉢を置くことはあったでしょう。

中澤

まだまだ、ご質問もありそうですが、時間になりましたので、ここで日本エクステリア学会の特別講演会を終了いたします。



講演会終了後、山田順子先生と日本エクステリア学会の会員との記念撮影